

海外で活動する日本人日本語教師に 望まれる資質の構造化

—海外教育経験を持つ日本人日本語教師への 質問紙調査から—

平畑 奈美

要 旨

本研究は、海外での日本語教育経験を持つ172名の日本人日本語教師を対象に質問紙調査を行い、海外での活動に必要と考えられる資質を分析したものである。先行研究から設定した60の質問項目のうち、最も重視されたのは、「柔軟性」「現地の文化・価値観の理解と受容」「生活適応能力」を筆頭とする、現地への適応に必要な資質だった。また、因子分析を行い、望まれる資質を構成する尺度として六つの因子を抽出した。6因子はその評価点順に「意欲」「人間性」「教育能力」、そして「コーディネート能力」「国際感覚」「日本人性」である。その内容から見て、前者の3因子は、国内外を問わず日本語教師に常に必要な、基本的な資質であり、後者の3因子は特に海外で望まれる資質ではないかと考えられる。今後海外でも効果的に活動できる日本語教師を養成するためには、関係者がこうした資質の概要を意識し、また、海外での事例に触れていくことが重要であろう。

キーワード

日本語教師の資質・海外での日本語教育・質問紙調査・因子分析・日本語教師養成

1. 研究の背景

海外の日本語教育において、母語話者教師の占める部分は大きい。2006年時点での調査¹からの単純計算では、日本語母語話者教師の、およそ4人に1人が海外で活動し、海外の日本語教師の3人に1人が母語話者である。本名・岡本(2000:29)は、「海外で働く日本人日本語教師は、母語話者教師としての日本語知識だけではなく、日本に関する生きた情報源」として、幅の広い、様々な資質・能力が求められると述べている。海外において、「日本」そのものの体現者のように受け止められることもある「日本人日本語教師」が、適切な資質を備えていることが重要なのは言うまでもない。だが、海外の活動において望まれる資質とは、具体的にどのようなものであるのだろうか。

無論、「海外」には多様な現場があり、求められる資質も個々の状況によって異なるであろうが、その反面、海外という現場に共通する要素もあるだろう。立花（2002:13）は、国内と比較した、海外の日本語教育の特徴として「学習者には教室以外に日本語を話す環境がほとんどない」「日本のように設備が整っているとは限らない」等の点をあげている。海外の多様な教育現場のそれぞれで望まれる資質を、すべて個別に検討することは不可能かもしれない。だが、少なくとも日本語が母語として用いられているわけではない海外という場で、共通して望まれる資質に関して、その概要を把握しておくことは、今後、海外での活動を行う日本人日本語教師を養成する上での一助となるのではないだろうか。

本研究は、このような観点から、海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質に関する調査、特に従来行われていなかった実証的調査を行い、その概要についての基礎的な知見を得、それを構造化することを目的とする。

2. 先行研究

2-1 「教師の資質」に関する先行研究

そもそも「教師の資質」とは何か。渡辺（2002:57）は、日本語の「資質」は英語の *competency* に近く、知識、スキル、特性等包括的なものを指すとしている。また1997年の文部省教育職員養成審議会答申²では「教員の資質能力は、素質とは区別され、後天的に形成可能なもの」とされている。本研究もこれらに倣い、「日本語教師の資質」を、日本語教師に望まれる知識・能力・素養・活動内容等を含むものとして、広義に捉えることとする。

「教師の資質」についての議論は、近代教育学の黎明期から今日に至るまで、世界の教育機関によって活発に行われてきた。国内においても、近年は「教育専門家としての力量」と並び、「総合的な人間力」や「情熱」等の資質が付加され、明記されるようになっていく（文部科学省中央教育審議会³ 2005）。対して、同じく「教師」とは呼ばれながら、「学校教師」の範疇には入らない日本語教師の資質についての議論は、それほど活発ではない。ただ、1999年の文化庁の報告書⁴では、「日本語教員に今後望まれる資質」として、言語や日本語教授についての知識能力、日本語教育の背景をなす事項についての知識理解に加え、「日本語を正確に理解し運用できる能力」「実践的コミュニケーション能力」「豊かな国際感覚」「人間性」等があげられている。しかし、例えば、「豊かな国際感覚」や「人間性」が具体的にどのようなものであるかの言及はない。また、これを定めた文化庁のホームページに「日本語教員」として記載されている人員が、国内で活動する教師に限られていることを考慮すると、これらの資質が、海外に教えに行く日本人日本語教師も想定したものとなっているかは不明である。

一方、横溝（2002）は、主に学校教師の資質に関する文献に基づき、日本語教師の資質を「人間性」「専門性」「自己教育力」に大別した。だが、国内の児童を対象とする国民教育に携わる学校教師と、国内外で活動する日本語教師の資質を同一軸で考えてよいのだろうか。学校教師を養成する者は、一度は自らが学校教育を受けた経験があるはずであるが、日本語教師養成を行う者はその限りではないことを考えても、より慎重な判断が必要だろ

う。実際に、海外で活動する日本人日本語教師、あるいは日本人に望まれる資質についての調査結果からは、いわゆる人柄の良さといった意味での「人間性」よりも、「実務能力」「ストレスマネジメント力」「対立処理能力」等が重視されるということが示唆されている(伊勢田他 1997、中西他 1991 等)。いずれにせよ、これら先行研究は文献や関係者の意見を恣意的にまとめたものが中心である。日本語教師の資質に関する実証的な研究例は少なく、海外で活動する日本人日本語教師の資質については、さらに少ないのが現状である。

2-2 平畑 (2007、2008) からの知見

そこで平畑は、海外での日本語教育活動において、日本人日本語教師に望まれる資質の概要を把握するための調査を行った。まず平畑 (2008) では、アジア 5 地域の日本語教育機関を代表する、非母語話者日本語教育者 5 名を対象にした半構造化インタビューを行い、グラウンデッド・セオリーを用いて望まれる資質のカテゴリー化を行った。さらに平畑 (2007)⁵ は、日本人の日本語教育有識者 19 名 (日本語教師海外派遣に関わる公的機関の部門代表者 7 名、学術領域の有識者 6 名、海外で長期的に日本語教育に従事した経験を持つ日本人日本語教育者 6 名) に対する同様の調査を行い、平畑 (2008) のデータと合わせて分析を行った。その結果、海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質として、「教育能力」「人間性」「社会的視点」の三つの上位カテゴリーと、それらの下位項目として計 60 のカテゴリーが抽出された。

平畑 (2008)、平畑 (2007) とも、有識者を対象とした質的研究であり、カテゴリーの抽出そのものが目的である。この研究を発展させるためには、これらのカテゴリー間の関係を明らかにすること、また様々な関係者の意識を広く明らかにしていく必要がある。中でも、海外経験を持つ日本人日本語教師は、海外で必要となる資質について、体験に基づいた評価を行うことができると考えられ、最初の調査対象として妥当であると思われる。

なお、石井 (2001: 20) によれば、質的研究と量的研究は、相互補完的關係にあるとされる。従って、望ましい資質についての定量的な調査を行うことは、質的研究によって明らかになった知見を確認する上でも有用ではないかと考えられる。

3. 調査

3-1 調査票の作成

以上の観点から、調査法として、平畑 (2007) の結果を基にした質問紙調査法を採用した。前述の通り平畑は、24 名のインフォーマントに対する半構造化インタビューから、908 の要件を取り出し、グラウンデッド・セオリー⁶を用いて、そこから三つのカテゴリーと、それぞれに含まれる 20 ずつの下位項目を抽出した。こうして抽出された項目は、海外で活動する日本人日本語教師の資質として、幅広い部分を網羅していると考えられる。従って、今回この 60 項目⁷を質問項目とし、海外で共通して望まれうる資質としての、その重要性を 7 段階尺度⁸で評価する調査票を作成した。各質問項目の詳細は文末資料に示し、本文中では略称と記号⁹によって表す (表 3 参照)。

3-2 被調査者

全世界に散らばる被調査者を完全無作為抽出するのは不可能であるため、今回は、海外で望まれる資質についての一定の傾向の把握を目指すこととし、海外での教育経験¹⁰を持つ国内外の日本人日本語教師に、電子メールや郵送によって調査票を配布、184件を回収した。欠損等のあるデータを除いた後、特異値を削除、天井効果と床効果¹¹のないことを確認し、最終的に172件の回答を有効データとして、SPSSversion13によって処理を行った。この172名の被調査者の属性分布を図1、図2に、また被調査者の海外経験の詳細（活動地域、勤務形態）¹²を表1、表2に示す。

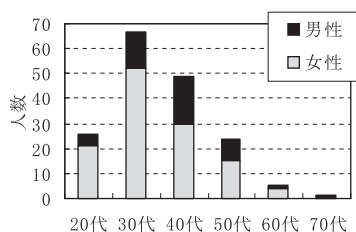


図1 被調査者の年代別属性内訳

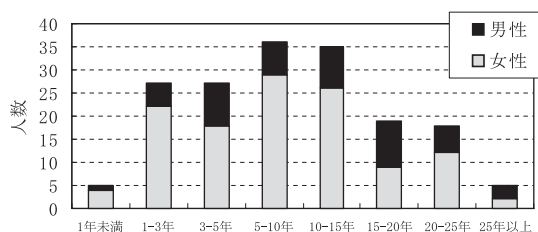


図2 被調査者の教育歴別の属性内訳

表1 被調査者の海外教育経験（活動地域）

| | のべ人数 | その地域での平均勤務年数 |
|----------|------|--------------|
| 中国（含台湾） | 43人 | 2.2年 |
| 韓国 | 20人 | 2.9年 |
| 東南アジア | 36人 | 2.8年 |
| 北・南アジア | 5人 | 1.5年 |
| 北米 | 14人 | 4.9年 |
| 中南米 | 6人 | 3.5年 |
| オセアニア | 15人 | 1.7年 |
| 西欧・中欧 | 13人 | 3.6年 |
| 東欧・旧ソ連 | 31人 | 2.9年 |
| 中東（含トルコ） | 5人 | 2.4年 |
| 計 | 188人 | |

表2 被調査者の海外教育経験（勤務・派遣形態）

| | のべ人数 | その形態での平均勤務年数 | |
|-------------------|---|--------------|------|
| 現地機関との直接契約 | 83人 | 3.5年 | |
| 公的派遣 | JICA ボランティア（青年海外協力隊等）・国際交流基金日本語教育指導助手・日露青年交流プログラム | 39人 | 2.2年 |
| | 国際交流基金日本語教育専門家 | 27人 | 4.2年 |
| | 国際交流基金ジュニア専門家 | 17人 | 2.4年 |
| | JALEX・JOI・Jcorp | 4人 | 1.8年 |
| | 国内教育機関・NGO・自治体からの派遣 | 26人 | 1.5年 |
| 教育実習・ワーキングホリデー | 10人 | 0.8年 | |
| その他（企業派遣、ボランティア等） | 26人 | 1.7年 | |
| 計 | 232人 | | |

4. 結果

4-1 評価点の単純集計

60の資質項目について、7段階評価尺度（-3～3に得点化）による平均点から求めた順位を表3に示す。

表3 60項目の7段階評価結果（N = 172）

| 順位 | 資質項目の記号と略称 | 平均点 | 順位 | 資質項目の記号と略称 | 平均点 |
|----|--------------------|------|----|---------------------|-------|
| 1 | H3 柔軟性 | 1.86 | 31 | T15 教室コントロールの能力 | 0.94 |
| 2 | H4 現地の文化・価値観の理解と受容 | 1.66 | 32 | H18 率直さ | 0.91 |
| 3 | H8 生活適応能力 | 1.66 | 33 | H20 つきあい方の公平さ | 0.90 |
| 4 | T6 自己教育力 | 1.60 | 34 | T14 現地社会実情に合った日本語指導 | 0.87 |
| 5 | H1 コミュニケーション力 | 1.58 | 35 | H13 自己分析力 | 0.87 |
| 6 | H12 前向きさ | 1.56 | 36 | C18 現地の利益を重視する姿勢 | 0.86 |
| 7 | H6 誠実さ | 1.52 | 37 | H14 人間愛 | 0.85 |
| 8 | T1 教授法改変力 | 1.51 | 38 | C4 自己のポジショニング | 0.83 |
| 9 | C12 国際人としての良識 | 1.49 | 39 | T19 指導上の適度な厳しさ | 0.77 |
| 10 | H9 社会人としての常識 | 1.45 | 40 | H17 意見交換への積極性 | 0.74 |
| 11 | T12 学習者の学びに従う姿勢 | 1.44 | 41 | C19 教育理念を持つ | 0.74 |
| 12 | C8 客観性 | 1.34 | 42 | T7 日本事情の知識 | 0.69 |
| 13 | H15 熱心さ | 1.33 | 43 | C1 相互交流・相互理解への配慮 | 0.69 |
| 14 | T4 学習者の動機づけ | 1.30 | 44 | C11 外来者としての立場の自覚 | 0.64 |
| 15 | H2 謙虚さ | 1.30 | 45 | H16 教師としての魅力 | 0.62 |
| 16 | C5 現地での日本語教育の意義づけ | 1.29 | 46 | C7 日本人としての自覚 | 0.58 |
| 17 | H10 おおらかさ | 1.28 | 47 | C17 業務の長期的把握と展望 | 0.57 |
| 18 | T2 学習者との交流 | 1.24 | 48 | C10 国際情勢理解 | 0.56 |
| 19 | T13 現地の学習スタイルの理解 | 1.23 | 49 | C15 学外環境への働きかけ | 0.55 |
| 20 | T5 文の提示・説明・練習技術 | 1.19 | 50 | C13 日本語教育現地化推進 | 0.51 |
| 21 | C20 業務改善への積極的姿勢 | 1.16 | 51 | T18 日本的な社会文化能力の育成 | 0.48 |
| 22 | H11 ネットワークの形成 | 1.16 | 52 | C16 世界の苦境・貧困への共感 | 0.48 |
| 23 | H19 わかりやすく話し説得する力 | 1.13 | 53 | T10 日本語使用イベントの企画 | 0.44 |
| 24 | H7 人の気持ちに対する感受性 | 1.12 | 54 | T8 現地語（外国語）能力 | 0.34 |
| 25 | H5 人間関係調整力 | 1.09 | 55 | C9 日本への貢献 | 0.31 |
| 26 | T11 日本語力 | 1.08 | 56 | T20 海外日本語教育の一般知識 | -0.13 |
| 27 | T3 個別技能別の評価・指導力 | 1.00 | 57 | C6 アドミニストレーション力 | -0.14 |
| 28 | T16 幅広く多様な能力や特技 | 0.97 | 58 | C14 海外日本語教育への批判的姿勢 | -0.19 |
| 29 | C2 日本を相対化して説明できる | 0.97 | 59 | T17 日本語教育の十分な経験 | -0.20 |
| 30 | C3 現地の政治・経済・外交等の理解 | 0.97 | 60 | T9 特定分野での高い専門性 | -0.24 |

1～3位を占める「柔軟性」「現地の文化・価値観の理解と受容」「生活適応能力」は、それぞれ元の質問文では、「柔軟性（異文化・環境の変化・自分とは違うものに対し、自分の視点を修正しながら受け入れる）」「現地の文化・人々の意識・考え方・価値観に興味を持ち、理解し、受け入れる気持ちを持つ」「衣食住の違いに適応し、外国で元気に安全に生活できる」である。これらが上位を占めているということは、その地を知り、その地に合わせていくための資質が、海外での活動に当たって最重視されるということを示す。ついで「自己教育力」「コミュニケーション能力」「前向きさ」「誠実さ」「教授法改変力」等が、上位に位置しているが、これらも、日本人日本語教師が海外の環境に適応し、円満

な人間関係を形成し、その現場に合った日本語教育を実施していくために必要な資質である。その次に、「国際人としての良識」「社会人としての常識」が位置づけられるが、これらは日本語教師の資質というよりも、国を離れた環境で業務を行うための基本的な資質であろう。総じて、海外で活動する日本人日本語教師に最も望まれるのは、環境に合わせていく力、適応力だと考えることができる。

4-2 因子分析

次に、因子分析を行って、これらの資質の潜在的構造を求めた。手法は主に、小塩(2004)、村上(1985)等に従った。まず、60項目のうち、7段階評価結果が0以下の値を示した、つまり日本語教師の資質の構成要素として重要ではないと判断された5項目を除外した。残る55項目について、検出力の高い最尤法による因子分析を行い、初期の固有値が1.5以上に達した6因子(f1～f6)を、説明因子として採用した。ついで因子間の相関を仮定して斜交回転(直接オブリミン法)による回転を行い、因子負荷量¹³の絶対値が0.325に満たない項目を削除しつつ分析を反復し、最終的に44項目を分析対象とした¹⁴。この段階でデータのKMO値は0.931、バートレットの球面性検定は0.1%水準で有意であり、このデータが因子分析に適合することが確認された。また、6因子の信頼性を検証するために、それぞれに対する α 係数を求め、6因子のいずれも α 係数は0.8以上であり、因子が尺度として有効であることも確認した。表4に、6因子の統計量と、下位項目の因子負荷量を示す。因子分析では、変数(ここでは質問項目)は、その相対的位置によって評価され、因子番号は、変数をより適切に構造化できる配置によって定められる。つまり因子に対する評価点の高さを表すのは、因子番号ではなく、下位尺度点である。今回下位尺度点は、各因子に含まれる質問項目(下位尺度)の、それぞれに与えられた被調査者全員の評価点の和を、含まれる項目の個数で割ることによって設定した。表5に、6因子の下位尺度点と、下位項目の内容から恣意的に決定した各因子の名称を示す。以下、表4、表5の結果をもとに、結果について詳述していく。

抽出された6因子中、もっとも重要であると判断されたf2は、その下位項目の内容から、「意欲」と命名した。自らの意図を人に伝え、人を動かしていく力、前向きに努力する積極的な姿勢を表すものと考えられる。こうした情意面の資質は、日本語教育に限らず、あらゆる活動の推進の原動力となる資質であり、最重要であると判断されたことも自然と言えよう。ろう。第2位に評価されたf4は、「人間性」と命名したが、「人間性」という言葉から連想されがちな、いわゆる「優しさ」よりは、誠実さ、公平さ、現地を尊重する謙虚な姿勢といった、人間的に円熟した態度に関わる項目が多く含まれている。第3位に評価されたf1は「教育能力」とした。これは日本語教師としての基本的な資質と言えよう。ここには語学指導の専門性のみでなく、学生指導の力や、社会人としての常識、教室内のコントロール能力等、教育活動に必要な、総合的な資質が含まれている。

第4位のf3は「コーディネート能力」とした。この資質は、教材や人材が不足したり、日本語教育の目的が不明確になったりしがちな海外において、殊に重要ではないだろうか。日本語の絶対的な必要性の少ない場、時には単独での活動を余議なくされる場で、日本人教師はいくつもの役割を兼任しつつ日本語教育を存続し、教育の目的や教授法を現地

表4 6 因子の統計量（パターン行列の因子負荷量）

| | | f1 | f2 | f3 | f4 | f5 | f6 |
|-------|---------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| T3 | 個別技能別の評価・指導力 | 0.50 | -0.21 | 0.04 | -0.05 | 0.04 | 0.12 |
| T5 | 文の提示・説明・練習技術 | 0.47 | -0.18 | 0.13 | -0.05 | 0.10 | 0.03 |
| T19 | 指導上の適度な厳しさ | 0.44 | 0.05 | 0.21 | 0.11 | 0.01 | 0.16 |
| H9 | 社会人としての常識 | 0.40 | -0.20 | 0.08 | 0.25 | -0.01 | 0.27 |
| C2 | 世界の中の日本について説明できる | 0.37 | -0.16 | 0.14 | -0.04 | 0.25 | 0.31 |
| T15 | 教室内コントロールの能力 | 0.36 | -0.05 | 0.14 | 0.21 | 0.13 | -0.02 |
| H19 | わかりやすく話し説得する力 | 0.06 | 0.94 | -0.10 | -0.07 | -0.01 | 0.04 |
| C20 | 業務改善への積極的姿勢 | -0.14 | 0.46 | 0.29 | 0.29 | 0.00 | -0.02 |
| H10 | おおらかさ | 0.03 | 0.42 | 0.01 | 0.12 | 0.19 | 0.16 |
| T6 | 自己教育力 | 0.31 | 0.40 | 0.24 | 0.26 | -0.14 | 0.02 |
| H12 | 前向きさ | 0.26 | 0.38 | 0.25 | 0.19 | 0.01 | 0.04 |
| C5 | 現地における日本語教育の意義づけ | 0.09 | -0.12 | 0.72 | 0.01 | -0.05 | 0.04 |
| T14 | 現地社会実情に合った日本語指導ができる | 0.16 | -0.08 | 0.67 | -0.18 | 0.05 | 0.08 |
| C10 | 学外環境への働きかけ | 0.03 | 0.06 | 0.67 | 0.08 | 0.11 | 0.13 |
| H11 | ネットワークの形成 | 0.01 | -0.14 | 0.61 | 0.31 | -0.08 | 0.00 |
| C13 | 日本語教育現地化推進 | -0.09 | -0.02 | 0.59 | 0.15 | 0.15 | -0.03 |
| T16 | 幅広く多様な能力や特技 | 0.07 | -0.20 | 0.51 | -0.11 | 0.16 | 0.09 |
| T1 | 教授法改変力 | 0.39 | 0.01 | 0.47 | 0.07 | -0.01 | 0.05 |
| T10 | 日本語使用イベントの企画 | -0.34 | -0.16 | 0.47 | 0.04 | 0.05 | 0.15 |
| C17 | 業務の長期的把握と展望 | 0.08 | 0.07 | 0.46 | 0.06 | 0.23 | 0.07 |
| H5 | 人間関係調整力 | 0.23 | -0.07 | 0.43 | 0.28 | -0.10 | 0.21 |
| C4 | 自己のポジショニング | 0.20 | -0.21 | 0.42 | 0.09 | -0.18 | 0.32 |
| H6 | 誠実さ | 0.17 | -0.04 | 0.05 | 0.63 | 0.18 | -0.06 |
| H20 | つきあい方の公平さ | -0.03 | 0.03 | -0.05 | 0.56 | -0.02 | 0.10 |
| T2 | 学習者との交流 | -0.13 | -0.24 | 0.02 | 0.55 | 0.07 | 0.07 |
| H15 | 熱心さ | 0.12 | -0.09 | 0.23 | 0.51 | 0.21 | -0.42 |
| H4 | 現地の文化・価値観の理解と受容 | 0.07 | -0.03 | 0.15 | 0.49 | 0.15 | 0.22 |
| H2 | 謙虚さ | 0.05 | -0.18 | -0.14 | 0.46 | 0.03 | 0.33 |
| C18 | 現地の利益を重視する姿勢 | -0.09 | -0.03 | 0.32 | 0.46 | 0.10 | 0.07 |
| H1 | コミュニケーション力 | 0.07 | -0.08 | 0.22 | 0.42 | 0.06 | 0.17 |
| T12 | 学習者の学びに従う姿勢 | 0.21 | -0.25 | 0.23 | 0.33 | -0.01 | -0.03 |
| C7 | 日本人としての自覚 | -0.10 | 0.08 | -0.04 | 0.20 | 0.69 | 0.05 |
| T18 | 日本の文化や社会文化能力を教えられる | 0.28 | 0.06 | 0.13 | -0.09 | 0.53 | 0.26 |
| C9 | 日本への貢献 | -0.18 | -0.24 | 0.16 | -0.09 | 0.47 | -0.05 |
| T11 | 日本語力 | 0.36 | -0.06 | -0.11 | 0.00 | 0.44 | -0.07 |
| T7 | 日本事情の知識 | 0.06 | -0.03 | 0.11 | 0.05 | 0.41 | 0.06 |
| C15 | 国際情勢の理解 | 0.02 | -0.11 | 0.09 | 0.07 | -0.03 | 0.56 |
| C16 | 世界の苦境・貧困への共感 | 0.04 | -0.08 | 0.06 | 0.16 | 0.11 | 0.52 |
| C12 | 国際人としての良識 | 0.30 | -0.16 | 0.02 | 0.17 | 0.00 | 0.49 |
| C3 | 現地の政治・経済・外交等の知識・理解 | 0.13 | 0.05 | 0.30 | 0.09 | 0.16 | 0.42 |
| T8 | 現地語（外国語）能力 | -0.11 | -0.13 | 0.19 | -0.05 | 0.13 | 0.40 |
| C11 | 外来者としての自覚 | 0.14 | 0.04 | 0.22 | 0.19 | 0.12 | 0.39 |
| H8 | 生活適応能力 | 0.29 | -0.05 | 0.02 | 0.19 | 0.07 | 0.36 |
| C1 | 相互交流・相互理解への配慮 | -0.27 | -0.23 | 0.06 | 0.26 | 0.17 | 0.33 |
| 因子間相関 | f1 | 1.00 | 0.22 | 0.29 | 0.20 | 0.21 | 0.24 |
| | f2 | 0.22 | 1.00 | 0.50 | 0.39 | 0.31 | 0.39 |
| | f3 | 0.29 | 0.50 | 1.00 | 0.44 | 0.39 | 0.43 |
| | f4 | 0.20 | 0.39 | 0.44 | 1.00 | 0.31 | 0.35 |
| | f5 | 0.21 | 0.31 | 0.39 | 0.31 | 1.00 | 0.23 |
| | f6 | 0.24 | 0.39 | 0.43 | 0.35 | 0.23 | 1.00 |

表5 6 因子の下位尺度点（平均点）による順位

| 順位 | 因子名 | 下位項目（略称） * 因子負荷量順に配列 | 下位尺度点 （標準偏差） |
|----|--------------|---|-----------------|
| 1位 | f2 意欲 | わかりやすく話し説得する力 / 業務改善への積極的姿勢 / おおらかさ / 自己教育力 / 前向きさ | 2.35 (1.03) |
| 2位 | f4 人間性 | 誠実さ / つきあい方の公平さ / 学習者との交流 / 熱心さ / 現地の文化・価値観の理解と受容 / 謙虚さ / 現地の利益を重視する姿勢 / コミュニケーション力 / 学習者の学びに従う姿勢 | 2.31 (0.97) |
| 3位 | f1 教育能力 | 個別技能別の評価・指導力 / 文の提示・説明・練習技術 / 指導上の適度な厳しき / 社会人としての常識 / 世界の中の日本について説明できる / 教室内コントロールの能力 | 2.05 (0.95) |
| 4位 | f3 コーディネート能力 | 現地における日本語教育の意義づけ / 現地社会実情に合った日本語指導ができる / 学外環境への働きかけ / ネットワークの形成 / 日本語教育現地化推進 / 幅広く多様な能力や特技 / 教授法改変力 / 日本語使用イベントの企画 / 業務の長期的把握と展望 / 人間関係調整力 / 自己のポジショニング | 1.89 (1.03) |
| 5位 | f6 国際感覚 | 国際情勢の理解 / 世界の苦境・貧困への共感 / 国際人としての良識 / 現地の政治・経済・外交等の理解 / 現地語（外国語）能力 / 外来者としての自覚 / 生活適応能力 / 相互交流・相互理解への配慮 | 1.85 (1.00) |
| 6位 | f5 日本人性 | 日本人としての自覚 / 日本の文化や社会文化能力を教えられる / 日本への貢献 / 日本語力 / 日本事情の知識 | 1.63 (0.89) |

社会の実情に適合するように改変していくことを求められ、またサポートを求めて周囲に働きかけていく必要もある。「コーディネート能力」は、そこで必要となる実務的な資質であり、「教育能力」を大きく発展させた、教育活動の運営に関わる資質と言えよう。

第5位のf6は「国際感覚」とした。世界情勢についての知識と理解、世界の貧困への共感といった認知的側面に加え、語学力や生活面での適応能力、「外来者であること」の自覚等といった、国外で活動するための実践的な能力も含んだ資質である。

そして、第6位となったf5は「日本人性」とした。その第一項目である「日本人としての自覚」は、元の質問文では「日本人としての自覚を持ち、自分が日本人の代表として見られる重みを理解している」となっている。中島（2005：3）によれば、「日本人性」とは、エスニシティの表現に留まらない広範な意味を持つとされるが、f5にも、日本人としてのアイデンティティに関わるものから、日本についての知識や理解、教師自身の日本語力まで、「日本」に付随する幅広い要素が含まれている。

なお、今回は斜交回転を行っているため、因子寄与ではなく、因子間相関が求められる。表4に記載した、6因子の因子間相関で、相関が強いものは、f2「意欲」とf3「コーディネート能力」(0.5)、f3「コーディネート能力」とf4「人間性」(0.44)、f3「コーディネート能力」とf6「国際感覚」(0.43)である。これに対して、f1「教育能力」、f5「日本人性」は、他の因子との相関が低く、独立した傾向がみられる。

5. 考 察

5-1 海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質とは

今回抽出された六つの資質のうち、重要性の高い因子として抽出された「意欲」「人間性」「教育能力」は、前述の横溝（2002）が、日本語教師の資質として設定した「自己教育力」「人間性」「専門性」に、それぞれ類似するものと考えられる。ただ、「自己教育力」は、f2「意欲」の下位項目の一つとして含まれていることから、「意欲」とは「自己教育力」よりも広い概念であり、どのような環境においても自己の精神的安定を保ちながら目的を遂行する意思の強さ、あるいは生活力に近いものと言うべきかもしれない。「人間性」については、従来様々な文書で日本語教師にとっての重要性が指摘されていたにも関わらず、その具体的な内容については明らかではなかったが、今回の因子分析の結果からは、日本語教師に求められる人間性とは、誠実さ、公平さ、学習者との交流をよく行うこと等、一般的な教育者の持つべき資質に加え、現地の文化や立場、利益を尊重し、日本語が母語ではあっても日本語を教える際に謙虚にふるまい、人と接することといった、特に異文化を背景に持つ人と関わる上で必要な配慮を含んでいることが判明した。さらに「教育能力」については、横溝（2002）の述べた語学教師としての「専門性」に加え、日本事情指導の能力や、教室運営能力等も含まれることがわかった。このように、先行研究によって指摘されてきた資質が海外で活動する日本語教師にとっても重要であることを裏付けると共に、それらを具体化し、先行研究の指しているものよりも広い概念でありうるということを示唆した点は、本調査の一つの成果と言えよう。

残る「コーディネート能力」「国際感覚」「日本人性」は、評価点では前述の三つの資質に劣るが、望まれる資質であることには変わりがない。おそらくは、前述の資質は、国内外、活動の場を問わず、日本語教師全般に望まれる基本的な資質であり、対して「コーディネート能力」「国際感覚」「日本人性」は、その内容から考えて、特に海外で活動する日本人日本語教師に必要となる付加的な資質であろう。

日本とは異なる生活環境、日本語による意思疎通が難しい場所や、日本語教育の存続が困難な場所で働くにあたって、状況を把握し、現地の人と協働し、理解しあうために、「コーディネート能力」と「国際感覚」が必要であることは容易に想像できる。しかし、「日本人性」については、その意味するものを慎重に考えなければならない。海外の人々にとって日本は外国であり、外国の文化に触れるために日本人教師を受け入れるという傾向はあるだろう。そこで日本人教師には、それぞれの土地ごとの「外国としての日本」のイメージを反映させた、「日本人性」が期待されるものと思われる。赴任地の期待に応えていくことは極めて重要である。一方で、日本人と呼ばれながら日本に関わることを教える教師として、「日本人性」とは何なのかを考え、自ら表していくことも重要である。平畑（2008）では、アジアで活動する非母語話者日本語教師から見た「日本人性」とは、ある種の断絶感を生起させるものとして記述されていたが、「日本人性」の表出が、「日本」と「日本でない国」の差異の強調につながるものであってはならない。だが、現実存在する、「日本」と「日本でない国」の差異の中で活動する個々の教師は、日本人性というものをどう表現するのか、準備しておく必要がある。「日本人性」は、海外で活動する日

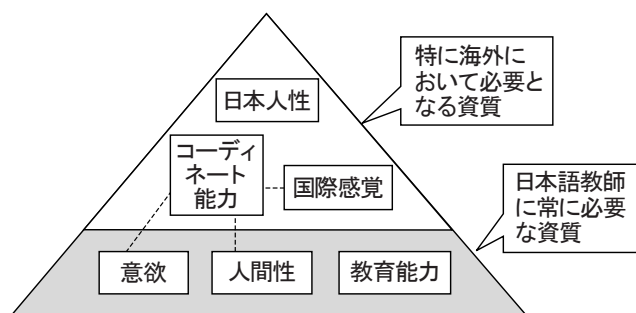


図3 海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質

本人日本語教師に最後に望まれる資質であり、従来言及されることの少ない資質であったが、日本語教育が海外での発展を企図するにあたって、今後検討していくべき課題であろう。

今回抽出された、これら六つの資質の構造モデルを図3に示した。海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質は、「日本語教師に常に必要な三つの資質」と、「特に海外で必要な三つの資質」に分けられる。前者は国内外を問わず、日本語教師にとって基本的かつ必須の資質であると思われる。だが、日本人日本語教師が海外において、より効果的に活動するためには、後者の資質も必要だろう。ただ、これら六つの資質は完全に独立するものではない。特に「意欲」「人間性」「コーディネート能力」「国際感覚」は、因子間相関の結果から見ても、相互に関係しあっているのではないかと考えられる。すなわち、意欲と人間性を高めることが、海外での活動にあたって必要となる、コーディネート能力や国際感覚の獲得につながる、あるいはその前提となる可能性があるということが、このモデルから推測される。

5-2 今後の課題

本調査は、海外で活動した経験を持つ日本人日本語教師自身が、海外で活動する日本人日本語教師に望む資質を分析したものである。これらが実際に、海外のどの地域でも必要とされるものであるか、その資質の有無は、現地での活動にどのような影響を及ぼすのか等については、今後データを積み重ね、検討していかなければならない課題である。

また、それぞれの資質、中でも「教育能力」以上に評価点の高い資質でありながら、従来積極的な育成の対象とされてきたとは言いがたい「意欲」や「人間性」について、これらをさらに掘り下げ、どう育成するかを考えていく必要もあるだろう。

ここで確認しておきたいのは、これらの資質のすべてを、すべての日本語教師が完全に身につけることは要求できないという点である。その理由として、まず、教師の資質というものは、日本語教育に限らず、いかなる教育分野においても、厳密には定めがたいものであり、また教師各自の個性を伸ばすためには完全に定めるべきではないということがある¹⁵。そして、もう一つは、日本語教師とは、現時点では法的な資格ではなく、その満たすべき要件も公式には確定していないということがある。

海外で活動する日本語教師に望まれる資質を明らかにする価値とは、教師に対する要求基準を設定することにあるのではなく、むしろ、日本語教師養成において、教師志望者と教師教育者に、共に考える材料を提供することにあるのではないだろうか。たとえ行政上の規定はなくとも、日本語教育に携わる者が、その良心を示す課題として取り組み続けること、そのものにあるのではないだろうか。

さらに、もう一点、日本語教師の資質とその養成に関して、考えておくべきことがある。平成15年度の文化庁調査¹⁶では、同年度、国内のすべての日本語教師養成課程修了者の人数は11,635人で、このうち日本語教育に従事したことが確認できた人数は、約3%に当たる210人のみであり、その過半数を占める120人が海外へ赴任した。単年度の調査ではあるが、日本語教師養成を受けても日本語教育に従事しない者が圧倒的多数であることが、この結果から読み取れる。この現実を考慮すると、日本語教師養成は、狭義の日本語教育能力の伸長に特化した内容に絞ってしまふべきではないと言えるだろう。ただ、少数ではあっても、受講者の中には実際に教壇に立つ者もあり、しかも、その相当数が最初の教育実践の場として海外を選ぶのである。従って、今後の日本語教師養成は、日本語を教えるために必要な専門的能力を育成するという基本的機能を果たしつつ、進行する国際化社会に生きる人材を育てるための全人格的教育としての性質を強化し、海外での活動の基本ともなる、人間性に関わる資質の向上を目指していくことが望ましいのではないか。

一般に、そのような資質は実社会の中で磨かれるもので、教育によって高めることは容易ではない。だが少なくとも教師志望者に、海外で活動する日本語教師に望まれる資質の構造を示し、それらが必要とされる理由を問うことは、将来海外で日本語教育を行うかどうかに関わらず、それぞれの人間の成長へ向けた足がかりとなるはずである。さらに、日本語教師がそうした資質を欠いた時、どのような事態が生じたのか、どのような解決の道を模索したのかを示す事例を提示し、ケースメソッド¹⁷による議論を深めていくことによって、わずかずつでも、「意欲」「人間性」「コーディネート能力」「国際感覚」等、相関する資質を高め、ひいては日本人日本語教師に望まれる最後の資質である「日本人性」について、各自がそれぞれの概念を見出し、判断を下せるようになっていくことも期待できると考えられる。

水谷(2000:3)は、日本語教育は、「全世界の人々を学習者とする発信型の教育活動であり、日本国内での完結が許されない」としている。日本語教育が海外において、より受け入れられるものとなるためには、それを担う教師が、海外の人々に、より受け入れられる存在でなければならない。本研究は、その方策を探る手始めとして、未だ緒ついた段階であり、今後も様々なアプローチによって研究を継続していく必要があるだろう。

付記：本稿は、2007年日本語教育学会春季大会において発表したデータに対し、新たな分析処理を行ったものである。

謝辞：本調査にご協力くださいました、すべての方々に心から感謝いたします。

注

- 1 海外データ（国際交流基金）<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/index.html>
国内データ（文化庁）http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittaichousa/h19/gaiyou.html
(2009年3月10日参照)
- 2 文部省 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/yousei/toushin/970703.htm
- 3 文部科学省中央教育審議会答申（2005年10月26日）
- 4 文化庁「日本語教員養成の新たな教育内容」<http://www.bunka.go.jp/1kokusai/main.asp?ofl=show&id=1000002871&clc=1000011189&cmc=1000001815&cli=1000002848&cmi=1000002863>{9.html (2008年3月10日参照)
- 5 出版は前後しているが、平畑（2008）は、平畑（2007）に先行する研究である。
- 6 グラウンデッド・セオリー（Grounded Theory）は、1967年に、グレイザーとストラウスにより提唱された。データに埋め込まれた複数の概念（カテゴリー）を抽出し、その関係づけからの理論生成を目指す仮説発見型の分析手法である。
- 7 質問項目の文章は質的データから採用されたもので、その中には意味に二重性がある（double barreled）質問も生じるが、そうした質問は、因子分析の過程で通常削除される。
- 8 このようにして作成した質問項目は、すべてが重要と考えられるため、評価基準を設定しなければ、天井効果（注11参照）が生じてしまい、評価が不能となる恐れがある。そこで先行研究の中でも「日本語教師の持つべき資質の前提である」との記述が多く見られた「日本語に関する基礎的な知識」、具体的には、日本語教育能力検定試験合格レベルの「基礎的な知識」が、日本語教師の前提たりうるのと同程度に、その他の資質も、海外で活動しようとする日本人日本語教師にとって必須のものであるかという観点で、評価してもらうという形式を取った。各質問項目の資質が、評価基準である「基礎的な知識」よりも「ずっと大切」を3点、「大切」を2点、「少し大切」を1点、「同じぐらい」を0点、また負の値については、「基礎的な知識のほうが」と入れ替えて記述し、同様に-3点から-1点まで設定した。
- 9 記号に用いられているT、H、Cのアルファベットは、それぞれ平畑（2007）が、質的分析によって設定したカテゴリー「教育能力」「人間性」「社会的視点」を表す。なお、これは本稿中因子分析（後述）によって抽出されたf1「教育能力」f4「人間性」と、対応するものではないが、その性質上、相当の一致は見られる。
- 10 本稿の被調者の海外日本語教育経験は、最短のもので3ヶ月であった。なお、図2の「教育歴」には、国内での経験も含まれる。
- 11 天井効果は、結果が評価尺度の上限（床効果は下限）に偏り、真実の値が得られなくなる現象で、「平均値+標準偏差」が取りうる最高値（今回は+3）以上となると生じたこととされる。床効果は天井効果の逆であり、今回は-3以下で生じたこととする。
- 12 表1、表2の「のべ人数合計」が異なるのは、複数地域を経験する教師は、複数派遣形態を経験する教師よりも少ないからだと考えられる。なお、被調査者の調査時点での居住地は、アフリカ大陸以外の4大陸にまたがる22カ国・地域であり、所属機関は35機関にわたった。
- 13 因子負荷量は、観測変数に対する影響の大きさを表す。各因子に対する因子負荷量が大きいということは、その項目が、因子決定に及ぼした影響が大きいということになる。
- 14 「柔軟性」その他、7段階評価結果の単純集計で、評価点の高かった項目も削除されたのは、その項目の持つ意味合いが多岐に渡り、尺度の構成要素としては、説明率が十分ではなかったことによると考えられる。
- 15 注2の教育職員養成審議会の答申にも、「すべての教員が一律にこれら多様な資質能力を高度に身に付けること」は期待しないと明記されている。
- 16 文化庁 http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittaichousa/h16/gaiyou.html
(2009年3月10日参照)
- 17 20世紀初頭より、米国のロースクールやビジネススクール等の実務家養成大学院において使用されている、事例研究を用いた教育方法。

参考文献

- 石井敏 (2001) 「異文化コミュニケーション研究の背景 第2章研究の方法と視点」石井敏他編「異文化コミュニケーションの理論」有斐閣ブックス、19-27
- 伊勢田涼子他 (1997) 「海外で教える日本語教師養成についての基礎的研究」平成8年度科学研究費補助金(国際学術研究)研究成果報告書
- 小塩真司 (2004) 『SPSSとAmosによる心理・調査データ解析 因子分析・共分散構造分析まで』東京図書
- 立花秀正 (2002) 「何が違う 海外の日本語教育」『月刊日本語』2002年5月号、アルク、12-15
- 中島智子 (2005) 「異文化間教育研究と『日本人性』」異文化間教育学会編『異文化間教育』第22号、アカデミア出版会、2-14
- 中西晃他 (1991) 「日本人の国際資質」中西晃(編)『国際的資質とその形成：国際理解教育の実証的基礎研究』多賀出版、127-238
- 平畑奈美 (2007) 「海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質—グラウンデッド・セオリーによる分析から—」『早稲田大学日本語教育研究』第10号、31-44
- (2008) 「アジアにおける日本語母語話者教師の新たな役割—母語話者性と日本人性の視点から—」『国際交流基金日本語教育論集世界の日本語教育』第18号、1-19
- 本名信行・岡本佐智子 (2000) 「アジアにおける日本語教育の今日的課題」本名信行・岡本佐智子(編)『アジアにおける日本語教育』三修社、9-32
- 水谷修 (1999) 「日本語教育研究の未来」『日本語教育』第100号、日本語教育学会、2-6
- 村上隆 (1985) 『変数間の関係の構造を探る—因子分析』海保博之編「心理・教育データの解析法10講」福村出版、150-172
- 渡辺文夫 (2002) 『異文化と関わる心理学—グローバル化の時代を生きるために—』サイエンス社
- 横溝紳一郎 (2002) 『日本語教師の資質に関する一考察：先行研究調査より』「広島大学日本語教育究」第12号、49-58

〈資料〉 調査票質問項目

| | |
|-----|--|
| T1 | 教授法を海外の現場にあわせてアレンジでき、現地の学習者にあったコースデザイン・カリキュラムデザイン・教材加工ができる |
| T2 | 学習者一人一人と、人間同士として細やかに親しく接する |
| T3 | 発音・作文・会話など個別技能について、学習者の力を正しく評価でき、誤用を適切に修正でき、助言を行える能力がある |
| T4 | 学習者の興味を引き出し、動機付けができる。学習者が興味を持ってないテーマや質問を強制しない |
| T5 | 適切な提示、場面作り、例文作成や、わかりやすい説明、効果的な練習などができる |
| T6 | 教師として、内省し、勉強し、目的を持って向上している |
| T7 | 日本事情、日本の文化・歴史・社会についての知識 |
| T8 | 現地語能力があるほか、世界の様々な言語についてある程度の知識を持ち、言語を相対的に捉えることができる |
| T9 | 日本語教育学研究・日本研究・応用言語学・文学など特定の学問領域についての高い専門性 |
| T10 | 生きた日本語に触れたり、実際に使ったりする場・機会を設けるために、各種イベントを企画する |

| | |
|-----|--|
| T11 | 教師自身がきちんとした日本語（基本的な日本語力、自然な音声や話し方）を身につけている |
| T12 | 学習者の学びに従い、学習者の考える力・表現する力・学ぶ力が増すことを重視する |
| T13 | 現地の学習者の気質、志向、信条、学習スタイルや受けてきた教育のあり方などを理解できる |
| T14 | 卒業後の進路や、留学、実社会（企業など）での運用など、学習者の将来の必要性を念頭において、多様な日本語教育が行える |
| T15 | クラスルームコントロールの力（意識を集中させたり、気持ちの切り替えをさせたりできる） |
| T16 | 狭い語学教育に留まらない様々な能力を持っている（趣味・特技・資格・IT能力など） |
| T17 | 日本語教育の十分な経験 |
| T18 | 日本の文化や価値観（社会文化能力）を、自然に伝えられる |
| T19 | 学習者におもねることなく、叱るべき時には叱る |
| T20 | 海外での日本語教育全般に関する事例を多く学んでいる |
| H1 | コミュニケーション力（同僚をはじめ、現地のいろいろな人といろいろな場面で心を開いて親しく付き合え、日本人だけで群れない） |
| H2 | 謙虚さ（いばらず、かつ卑屈にもならない） |
| H3 | 柔軟性（異文化・環境の変化・自分とは違うものに対し、自分の視点を修正しながら、受け入れることができる） |
| H4 | 現地の文化・人々の意識・考え方・価値観に興味を持ち、理解し、受け入れる気持ちを持つ |
| H5 | 人間関係調整力（人間関係の葛藤やトラブルに対処でき、人を慰めたり励ましたりもできる） |
| H6 | 誠実さ（良心と悩みを持ち、言行一致し、約束を守り、問題には正直に正面から向き合う） |
| H7 | 感受性（周りの人の気持ちや希望、状況を察して対応できる） |
| H8 | 生活適応能力（外国で生活を設営し、衣食住の違いに適応し、危険を避け元気に生きていく） |
| H9 | 成熟した社会人としてルールを守り、常識を持ったふるまいができ、基本的な事務もこなせる |
| H10 | おおらかさ（適度に楽天的で明るく、自分を追い込みすぎない） |
| H11 | 人脈作りができ、ネットワークを広げられ、リソースや情報を多く持つことができる |
| H12 | 前向きである（物事を肯定的に捉え、根性があり、あきらめてしまわない） |
| H13 | 自己分析力（自分の個性、短所や長所、見栄や自己防衛も見つめ、冷静に分析できる） |
| H14 | 人間に対する愛情と感謝、人とともに傷ついてもかまわないという覚悟、信頼できる人を持っている |
| H15 | 熱心さ（仕事に対する意欲・熱意・使命感を持ち、仕事が好きでベストを尽くす） |
| H16 | 人を自然に引きつける魅力や、先生と呼ばれるにふさわしい品格、教養などが、外見からも内面からも感じられる |
| H17 | 議論・討論・報告・相談をよく行い、人との意見交換を重視する |
| H18 | 率直さ（自分の意見をはっきり口に出せ、裏表がなく、必要な場面では自己主張もできる） |
| H19 | 話す力・説得力（誰にでもわかりやすい話し方・適切なプレゼンテーションができる） |
| H20 | 周りの人すべてと公平につきあう（特定の人をひいきしていると思われない） |

| | |
|-----|--|
| C1 | 相互交流・相互理解や世界平和など、大きいものにつながる日本語教育のあり方を考えられる |
| C2 | 世界の中で日本と日本人を相対化してとらえ、外国人にわかりやすく客観的に説明することができる |
| C3 | 現地国家の政治・経済・歴史・外交・教育政策、対日感情や日本との関係についての知識と理解 |
| C4 | 現場の状況や人々の利害を広く総合的に認識し、その中で、自分の位置づけ（ポジショニング）をして、行動を決められる |
| C5 | 現場の状況を踏まえて、何のためにそこで日本語教育を行うか、そこでの日本語教育にはどのような意義・可能性があるのか考えられ、自分なりの答えを持てる |
| C6 | マネジメント・アドミニストレーション能力（教育環境の整備、人事管理、予算作成、会計管理、業務計画立案） |
| C7 | 日本人としての自覚を持ち、自分が日本人の代表として見られる重みを理解している |
| C8 | 客観性（社会の現実や世界の文化に対する十分な知識を持ち、先入観やステレオタイプを抱かず現実を見つめ、比較・評価できる） |
| C9 | 広い意味での日本への貢献を意識した日本語教育が行える（日本への理解を促進する、知日家を育てる） |
| C10 | 現地のさまざまなコミュニティ（現地日本人社会、現地の省庁など）への働きかけ、理解や協力の要請、説得、調整などができる |
| C11 | 外部の人間である自分の立場をわきまえ、その地域の枠組を尊重し、それを前提とした日本語教育ができる |
| C12 | 国際人の常識と良識を持っている（むやみに自国をおとしめたり、宗教を軽く扱ったり、不適切な話題を選んだりしない） |
| C13 | 日本語教育の現地化、現地日本語教育の発展、浸透、拡大を図る |
| C14 | 海外で日本人という立場で日本語教育を行うということに対する批判的な視点（その地で日本語を教えることは重要であると一方的に決めつけない） |
| C15 | 世界の歴史・経済・政治・宗教や主な紛争の背景など、国際情勢全般に関する総合的知識 |
| C16 | 世界の中の苦境、富や力の不平等を知っており、その中で日本の豊かさと、その意味を考えられる |
| C17 | 仕事の長期的な流れ（前任者の仕事や過去の経緯）をとらえ、それを壊すことなく、次へと続けていくような仕事のやり方ができる |
| C18 | 現地にある者として、現地の立場を尊重し、現地を守るという視点が持てる |
| C19 | 日本語教師である前に教師であるという自覚、教育理念を持っている |
| C20 | 業務改善の視点を持ち、指示待ち人間とならず、必要な仕事を自ら考えて創り出していきける |

*実際の質問紙では、質問記号は表示せず、質問はアトランダムに配置された。